

復興支援—八戸港より

平成 23 年 7 月記

北海道支部（震災復興支援室併任）

テクニカルエキスパート 星山 隆

復興支援のため 4 月 21 日に北海道を出発し、災害業務研修のため仙台を經由して 4 月 23 日に八戸入りしました。事務所近くには商業施設ピアドゥ（イトーヨーカドー等）、宿舎近くにはラピア（長崎屋）があり、生活用品購入も避難場所にも安心しました。

執務場所として八戸港湾事務所の副所長室を SCOPE 用に緊急に空けてくれました。

業務の開始は 4 月 25 日からで、まずは八太郎地区北防波堤（中央部）からでした。当初、事務所では復旧を急ぐため「被災ケーソンは全て残置する断面」で数量・資料等を作って、被災写真の整理を行っていました。4 月 28 日事務所と本省の打合せにより、被災延長約 1500m の約 150 断面の殆どが大幅変更となり、事前に準備していた断面・数量・積算資料等が使えなくなり、ゴールデンウィーク中に作成し直すことになりました。

被災ケーソン 60 函中 39 函浮上再利用とし、上部コンクリート・蓋コンクリート・中詰材を撤去、浮上蓋取り付けした後に浮上させる。残りの浮上不可の 21 函は砕岩棒で破碎し、グラブ船（ヘビー級）にて撤去（破碎後岩盤浚渫）し、バックホウ揚土にて陸揚げする方針に変わりました。浮上可能・不可の判断基準に明確なものが無かったため苦労しました。

5 月 12 日現地査定調査後、ケーソン撤去は「被災前現地盤より浅い箇所のみ撤去」と決定され、撤去工・基礎工・根固工の数量が変更となりましたが、「水深 1m 以下に没しているケーソンは浮上の際、側壁が水圧に耐えられないのではないか」との問題が発生し、結局、浮上ケーソンは 1 函のみとなり、再度の数量・図面積算資料の変更となりました。

5 月 30 日に、本省と財務との打合せが終わり 1 号災について完了しました。

災害復旧の場合には、方針が確定する前に手戻り覚悟で進まなければ時間が足りないことが辛かったです。

災害発生から約 3 か月たった 6 月 10 日に初めて被災現場を船上から見ることができました。被災状況は写真では見ていましたが現状は写真を超えていました。時間が許すならば業務開始前に見ることができたなら良かったと思います。

八戸港で執務中の星山T E（手前）と山野川T E（奥）



上空からみた、被災後の八戸港北防波堤



(Google マップより)

八太郎地区北防波堤（ハネ部・中央部）の被災状況

中央部は 60 函のケーソンが被災し上部工が水上に出ている数少ない箇所



港湾施設は徐々に活動開始していますが、3ヶ月経ってもまだ手付かずの部分も

津波で流されたコンテナ



引き波により製紙工場から紙材が北防波堤(基部)移動



八戸港内の県施設（第二工業港管理室）



フェリー埠頭近くの市営バス待合所

